

# ライブラリー・セミナー傍聴記 : 「バッハの神学文庫」を受講して

著者	鳥海 高広
雑誌名	ライブラリーレポート
号	3
ページ	35-36
発行年	2015
出版者	東京音楽大学附属図書館
ISSN	2188-4706
著者版フラグ	publisher
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1300/00001078/">http://id.nii.ac.jp/1300/00001078/</a>

## 「バッハの神学文庫」を受講して

報告：鳥海 高広

ライブラリー・セミナーを開催する前に、一度図書館員のためにお時間をいただき、丸山先生から寄贈資料について講義をしていただきました。

その時に先生から、バッハ研究に関して「作品の成立年代を特定することを中心とした資料研究は 20 世紀に終わり、21 世紀はバッハの作品を神学的テキストから読み解くことが中心となる」というお話がありました。そのために必要な資料を、今回図書館に寄贈し、今後の研究に役立てて欲しいとおっしゃっていました。

そして、今回、寄贈いただいた資料を用いて、一般の方にも広く門戸を開いて、バッハと神学についての講義をしていただくことになりました。

講義は先生が作成した 10 ページの参考資料の解説から始まりました。その解説の途中で、随時バッハが生きていた当時のルター派の神学の状況についての説明がありました。その後、当時の神学的な解釈がバッハの創作に具体的にどのように用いられたのかが解説されました。

特にカンタータ第 61 番の例を用い、その神学的解釈が詳しく述べられました。また、アーノクトールとリリングの録音を聞き比べ、全く違った演奏がなされた理由を神学的な解釈を中心に述べられました。

さらに、カンタータ第 12 番についての説明と、当時の「創造」というものの考え方が解説されました。

そして、神学テキストが直接用いられる声楽作品ではない器楽曲の場合には、どのように神学的な解釈が用いられるのか、ということゲマトリアの解釈から探る、ということが解説されました。

ここで時間切れとなり、予定していた「インベンション第 2 番」の解説に至りませんでした。私自身、器楽作品を聴くことが多いので、神学的な解釈が器楽曲にどのように応用されるのかにとっても興味があったので、とても残念でした。

講義を聞いて、バッハの作品を聴いたり演奏したりするためには、ただ単に音を追うだけではなく、その背後にバッハが作品に込めた神学的なメッセージを読み取ることが大事だということがわかりました。

もちろん、すべてのバッハ作品が神学的に解釈できるのかはわかりませんが、そういったアプローチがあることを知るのはとても大事だと思いました。そのような視点で作品を見たり、聴いたりすることによって、バッハ作品の新たな面が理解される場合も少なからずあると思いました。

その一例として一番納得したのが、カンタータ第 61 番の演奏比較の部分でした。確かに当時の演奏習慣から考えればアーノンクールのような演奏が一般的で、逆に言えばリリングのような演奏は当時の演奏習慣を知らないのかと思ってしまいそうになります。そこに神学的にテキストを読み込み、演奏に反映するというのを考えると、リリングのような演奏も解釈として成り立つのだらうと思いました。一概にどちらが正しいのかという判断は出来ないし、そういった作品の背景を考えることをしなければ生まれてこない演奏というのも存在し、それが一聴してわからないということも往々にしてあり得ることを知りました。今までそういった神学的背景を考えてバッハの作品を演奏したり鑑賞したりしたことが無かったので、とても新鮮な驚きを感じるとともに、こういった背景があることを多くの人は知らないのかもしれないと思いました。

実際にバッハの作品を聴いたり演奏したりすると、普通感覚ではちょっと異質なフレーズや構造を感じるがありました。不自然な音程の跳躍や、フレーズがちょっとだけ短かったり長かったりするな、と感じることが今まであったのです。そういう、なんとなく引っかかっていた部分が、もしかしたら、神学的に解釈したら解決するのかもしれないと思いました。

今回の講義を受けることにより、バッハの作品を理解するためには、バッハが生きていた時代の思想背景を知ることが大切だと言うことがわかりました。バッハの時代、そして教会音楽家としてのバッハを理解するためには、バッハを取り巻く時代の思想や、神学についての理解がなければ、本当の意味で作品を理解することは難しいのかもしれないと思いました。

そう考えると、バッハという作曲家一人を理解するためにも、その時代の思想を知るための資料はもちろん、神学的な背景を理解するための資料など膨大な資料が必要です。そうした資料を提供するのが図書館の重要な仕事だということに気づかされました。

今後資料収集を考える時には、音楽資料だけを揃えるのではなく、関連資料を集め、奥行きを持った蔵書構成をすることが必要なのではないかと考えます。

もちろん、一つの図書館ですべての資料を揃えることは難しいですが、他の図書館との連携や、ネット上に公開されている資料を駆使することによって、資料提供の幅は広がります。常に、最新の情報にアンテナを張り、知り得た情報を利用者に提供できる体制を整える必要があると感じました。そのためにも、図書館員一人一人が得意分野を活かしながら連携し、知識を共有していくことが重要だと思いました。